

と実行に移されて、毎年、数人ずつの中国の人が、群馬県を訪れています。日中永久の親睦はこういうことから始まり、これがだんだんと実を結んで大きな絆になると、私たちは信じて実行しています。

終戦後、私たち一家は土に生きる喜びと幸せを求めて、再びこの火の山のふもとに帰り、やせ衰えた荒野に鍬を振ってから、すでに五十数年が過ぎてしまいました。が、ここ赤城山のふもとの開拓でも、厳しい開墾作業とそれをあざけり笑うがごとき天災との戦いに疲れ果てて、かなりの拓友が死んでいきました。静かに冥福を祈るのみです。

また、生き残っている人々の顔にも辛苦のしわが深く刻まれてしまい、髪の毛も霜のごとくに白くなってしまった。しかし反面その顔には、成すべきことは全部果たしたという安らぎも見られます。

私たちが、ここに入植した当時に抱いていた理想や夢は、必ずしもその通り実現されておらず、残念な気持ちもなくはありませんが、五十数年かけて努力した「昨日」があり、平和の「今日」があります。

心身共にたくましく育ったであろう、二世、三世がいて、その顔は明るく瞳は輝いています。この後継者たる若者には、これからの世代を頑張ってもらい、「今日」という現実と「明日」という希望に対して、限らない期待をかけたい。村づくりには、「経過駅」はあっても、「終着駅」が無いことを肝に銘じて、命の限り、力の限り前進して欲しいと願うばかりです。

大正生まれの我が青春

兵庫県 神吉 一夫

一 古き良き時代の大連

私は、大学に入るまではずっと大連で過ごしていた。大連の花街にあった割烹料亭が我が家であった。満州への玄関口であった大連は二十万都市で、「東洋のパリ」とも言われていた美しい都会であった。だれしも太平洋戦争の前途に暗雲が垂れ込めてきたころにおいても、大連の花街では平和な時代の日本風の正

月の仕来りが続いていたなどとは思ってもいないであろうが、本当に日本内地と同様な正月風景が続いていたのであった。

日本内地では、統制経済のために自由が束縛されていたが、ここでは名のみの統制で、市内ではまだネオンが輝いていた。東京の大学から休暇で帰省する際には、日満航路は船団を組まないとアメリカの潜水艦に狙われるということで、出航が中止になるという状況であったが、そんな戦局のときにおいても大連の日常生活は、余裕を持っていて戦前とあまり変わらない風情であった。特に正月は、お客さんに少しでも内地の正月気分を味わってもらえるようにと、松、紅葉そして皐月などの植木を取り寄せて庭の手入れをして華やかな気分を見せるようにしたし、兵庫の灘からは名のある銘酒を仕入れ、更に京都からは、京扇子や着物までも取り寄せるなどして準備をしていた。今でも記憶に深いのは、広い玄関には金屏風が立ち、その前には大きな鏡餅が供えられ、赤い毛氈もじゅうたんが廊下一面に敷き込まれて、餅花もちばな（繭玉）やお三宝には「御爲」が山積み

されて酒樽もそこに置いてあった。玄関の梁には立派な注連飾り、玄関前の両側には門松が置かれてあった。各部屋には、それぞれ正月や初春にふさわしい掛け軸、床の間の置物も新しいのに取り替えられ、来客に内地の香りを十分に味わって頂けるように万全の用意がなされて、両親が陣頭に立って采配を振るっていた。私たちはただ眺めているだけだった。

元旦を迎えると、朝早くからそれぞれの置屋から美しく着飾った芸者衆が、雪の中を人力車に乗って次々と年始の挨拶にきて、家の中は一遍に華やいで賑やかになった。帳場では仲居頭をはじめ仲居さん、女中さん、下働きさん、それに料理方の板前さんなどが十数人集まり、父や母に新年の挨拶をしていた。元日の朝は、女中さん以上は箱膳の前に座って正月の祝いをした。そのうちに太鼓を打ち、笛を鳴らして獅子舞がきたり、三河漫才が入ってきたりして、おひねりを渡されて出ていった。そんな風景は戦前の内地と同じであろうが、それが終戦の年でも続いていた。

午後になると、大連に本社や支店のある国策会社の

社長、支店長たちが東辺道や東北地方から新年の挨拶に出てきた幹部を招いての正月の宴が華々しく催されて、よき正月を過ごす風景で、いつときの平和を感じていた。

二 丙種の召集

そのような正月風景をあたり前のように思っただけで東京に戻ると、B 29爆撃機による無差別爆撃が日夜を問わずあり、大連とは別世界であった。友人知人も次々と兵隊にいき、学業を捨てていった。生来病弱だった私は姫路で予備検査を受けたが、丙種だった。当時の日本男子の当然進むべき道である、お国のための出陣もならず、このままでは勉強も思うようにならないので、昭和十八（一九四三）年には学業途中で一応大連に帰ることとした。

昭和十九年になると戦局いよいよ急を告げ、五体満足な男は次々と召集されていたが、ある日、ついに私にも「昭和十九年五月五日、東安部隊に入隊すべし」という、一片の赤紙が届いた。満州育ちの私でも、牡^ぶ丹江^{タンコウ}より奥地には普通では行けないこともあって、悲

壮感よりも未知の土地への旅立ちというような、期待感の方が強かったような気がする。当時「南国土佐を後にして……」という流行歌が巷に流れていて、若い私たちは楽しく歌っていたが、このメロディーは私の青春の譜であった。隠密召集のため派手な見送りは禁じられていたが、ただ前夜の壮行会では、友人たちとこの歌を思いの限りを尽くして歌ったことがいつまでも胸のうちに残っている。大連駅までは中学生の弟が、ただ一人見送りについできてくれた。汽車にがたごとと揺られながら東安に着き、既設の兵舎に入れられた。

翌日、最後の身体検査が行われたが、案の定不合格で、即日帰郷を命ぜられた。しかし男子がいったん覚悟を決めて家を出たからには、このまま「はい、そうですか」と言って、おめおめ帰るわけにはいかないという軍医に懇願して、受け入れられた。当時は、それが若者の当たり前な心持ちであった。軍服一式を受領して入隊した。そこで部隊別に分けられたが、私が連れて行かれたところは見渡す限り何も無い広野に、三角屋

根だけを出している穴蔵の兵舎群だった。そこはソ連との国境に近い東安省の虎林独立自動車第八十四大隊だった。

私は、弱兵ということで、保育班で初年兵教育を受けたが段々と体力もつき、結果的には強い兵に鍛えられ、いろいろな困難を乗り越えながら、何とか生き延びて現在まで元気できたことを思うと、鍛えてくれた先輩、同僚の戦友には感謝の気持ちでいっぱいである。保育班を下番した私は、部隊本部付を命ぜられ、そこで同じ初年兵の松本君と二人で勤務することになった。初年兵はだれしも同じであるが、軍隊組織での最新参者として働かなければならなかった。その当時には、軍隊でも食べ物の不足が顕著となり毎食の質、量は共に悪くなっていたので、余計に腹がへって仕方がなかった。松本君が私物として隠し持っていた甘味品を、こっそりとちょうだいして食べたこともあった。「貧すれば鈍する」との諺があるがまさにそのとおりだった。後日のことだが、帰国して松本君と再会したときに、そのことを告白し詫びを入れたが、

知っていたが黙っていたとのことだった。

そんな日常のなかにおいての楽しみは、トラックに乗って広野に出掛け、キジ狩りや、イタチ獲りなどをして獲物を食べたことで、最大のごちそうであった。班内で宴会をすると、必ず歌われるのが「南国土佐を後にして……」であった。この歌は、本当に苦しかった毎日の中にあって楽しみもあった私の青春の思い出の歌である。真つ赤な太陽が沈む広野を背にしての、軍歌演習で歌う「ここは御国の何百里、離れて遠き満州の赤い夕日に照らされて……」では、歌詞と場面が完全に一致していたときの様子が思い出され今でも印象深いものがある。

弱兵で保育班出身の私も二年兵となり、段々と体力もつき、強兵の仲間入りをした。昭和二十年の春になり、部隊は南方に移動させられたが、現地召集者である私はそのまま留守部隊要員として残され、寝食を共にしていた戦友と寂しく別れたが、これが永遠の別れとなった。

三 ソ連軍の不法侵攻

残留部隊は、将校以下ほとんどが現地召集者で、再編成のために本部事務は多忙で、連日忙しく過ごしていた。八月九日、ソ連軍は満ソ国境から怒涛のごとき勢いで侵攻してきた。薄々そのような情報は入っていたが、不可侵条約のこともあり、本当に侵入してくるとは考えられなかった。この状況は多くの記録などに残されているとおりで、まったく不意襲撃の言葉どおりであった。

戦車を先頭にして進んでくるソ連兵、それに対して日ごろから肉迫攻撃訓練していた若い兵隊が、爆薬を抱えて突っ込んでいった。砕け散る悲報が第一線から次々と報じられてくるが、もう我が部隊の戦力では立ち向かうことはできなかつた。牡丹江に後退するように命令が伝えられた。自分の命より大切と整備してきた車両を破壊したが、その黒煙が空を覆っていた。感傷にふけている暇などなかつた。輓馬ばんばは火災と爆発音と、それに加えての砲声により驚き狂ってしまった。ソ連軍の砲撃は熾烈をきわめて、三角兵舎にも

次々と命中し破壊され、辺り一面砲煙が渦を巻き瓦礫がれきが飛散し、人馬があちこちに倒れていた。マンドリン銃の乱射音が段々と近づいてきて、私の足元でも砂塵を巻き上げだした。あまりのすさまじさに、一キロメートルほど後の高粱畑コウライヤシに駆け込んで身を沈めた。

近くで二、三人の戦友が頭から血を吹き出して倒れた。そのままそでしばらく息を潜めていたが、夕闇が迫るころになると、ソ連兵の攻撃もちょっと下火になり、小康状態となった。部隊長が生存者の集合を命じて、「お前たちの命はもらった。日本軍人として最後まで立派に戦い死んでくれ。今夜はここで野宿するが、もしも逃亡しようとする者がいたら、本官が叩き斬る」と訓示した。一中隊長、A准尉以下半数以上の戦友は、壮烈な戦死を遂げていた。明日は我が身の運命と思い、疲れ傷ついた身を横になったが、満天に輝く無情の星が日に入った。すぐに浮かんだことは、大連はどうなっているのだろうか！ 家族はどうしているのだろうか！ 無事であるようにと祈っているうちに、疲労が一度に襲ってきて知らず知らずのうちに

眠ってしまった。

四 敗残兵の逃避行

暁闇の冷気にふと目が覚めて、このままここにいたのではどうにもならないと考えて、部隊長の指示を仰ぐべく、隣に休んでいた古兵を起こして付近を捜したが、部隊長の姿は見いだせなかった。しばらく戸惑っていたところ、前の方からきた古兵が「部隊長は昨夜遅く逃亡したそうだ！」と叫んでいた。何を言っているのかしばらくは判断ができなかったが、どうもでたらめではなさそうだった。信じられない事態に返す言葉もなく、啞然としてしまった。足が地にのめり込むような気持ちになり、へたへたとその場に腰を下ろしてしまった。時間の経過と共に、それは憤怒に変わっていた。「何ということか！ 昨夜の訓示では「逃亡者は斬る。日本軍人として最後まで立派に戦って戦死してくれ」と言った指揮官が逸早く逃亡するとは！」と、戦友と慨嘆した。「そんな部隊長にやる命は無い」と決心した。第一線では戦うべき武器も弾丸もなく、ただ肉弾で必死に抵抗しているのだ。精銳関東軍が最

後は必ず守ってくれるものと信じ切って、農耕報國に専念している開拓団家族を守る責任もあるし、また我々はあくまでも死力を尽くして戦わなければならぬのだと考えると、気持ちも落ち着いてきた。

生き残っていた戦友たちと話し合い、持っていた兵籍名簿も焼き捨てて、体一つになって牡丹江に撤退することにして、山中に入った。後になって無事に生還してみると、兵籍名簿を焼却してしまったことは、召集者の確認ができなくなり、関係者に随分と迷惑を掛けてしまい悔いたことだった。

敦化^{じゅんか}まで後退したが、ここで日本が敗れたことを知った。確か、八月十八日から十九日だったと思う。收容所の幕舎に集められたが、虎林から行動を共にして、ここまで撤退してきた戦友は十五人になっていた。「戦争は終わった」「敗戦日本はこれからどうなるのだろうか」「家族はどうしているのか」「日本に帰れるのだろうか」などと考え出した。いろいろなことが胸中を去来したが、具体的な行動をどうするかということには、まだ考えが及んでこなかった。

五 脱走を決意して断行

数日してから収容所で、終戦前に転属で虎林の部隊から出ていったS大尉に、ばったりと顔を合わせた。

地獄で仏に出会ったような気持ちになって、十五人の食糧の支給を懇願したが、大尉は「おれの部下の面倒を見るだけで手いっぱいだ！」と、すげなく断られた。確かに当時の収容所の状況からすれば、そういうことだったのだろうが、無念の涙をのんだものだった。部隊長は逃亡し、中隊長や付准尉は戦死している、見捨てられた敗残の兵は自分の命は自分で守るより他に手段は無くなっていた。「生か！ 死か！」こうなったら一か八か、ここから脱走して大連の家族のところに戻るしかないと思心した。十四人に図ったところ全員同じ考えで一決し、生死を共にして脱走を断行すると誓い合った。

しかし、ここまで助けあいながら行動してきた十五人の仲間でも、内地からの応召者と現地（満州）応召者とは、心理的に微妙な違いがあった。決心すると、五人の兵は他の制止を振り切り脱走を決行した

が、うち一人が収容所周囲に張りめぐらされた電流の通じている鉄条網に引っ掛かり、無惨にも感電死してしまい、残りの四人はソ連兵に捕まり、あえなく銃殺されてしまった。翌晩、またも五人が脱走を図ったが、これも捕まえられて無意味に夏草を血に染めてしまった。私は、「絶対に焦ってはならない、必ず好機は到来するからそれまでは白重する」と考えて、残った者に促した。同僚のBは、元特務機関員でロシア語が堪能だったので、彼に情報収集を頼んだ。しかし、相次ぐ脱走にソ連側の警戒は厳重になり、なかなかチャンスが訪れてこないうちに、寒気が増してきた。そのうちに、収容所から移動させられることになった。「ダバイ！ ダバイ！（早く）」と言って、マンドリンの銃口を向けて我々を小突きながら、行き先も知らぬ三日三晩の行軍となった。その間にも、逃亡と見なされて銃殺された者、疲労のあまり耐えきれなく死んで行く者が相次いだ。私も衰弱が甚だしく歩行も困難になってきたが、戦友に励まされて何とか一緒に歩いて歩いていた。

真っ暗やみの中を歩き続けたが、そこがどこであるのか判断もできない。そのうちに軍用に作ったと思われる十メートル幅の広い道に出たが、その両側に溝があるのが夜目にも見てとれた。とっさに、「ここだ！ チャンス到来！」と思った。この両側の溝に入って横になれば、身を隠すことができるかと判断した。警戒のソ連兵も相当に疲れていて、注意力も散漫になっているし、明かり気ひとつない真っ暗闇だ。神の助けだと、同じ思いの五人に目と目で合図した。落伍を装って、素早く溝に駆け込んだ。うまく転がり落ちて成功した。すぐに友はどうしたろうかと心配になったが、力の無い乱れた隊列は次第に遠くなり、死のような静寂が再び襲ってきた。すると五つの影が、むくむくと起きあがった。「成功だ、全員成功だ！」と、思わず小声を出して叫んだ。ここでぐずぐずしては危険だ。すぐに五人は反対方向に歩き出した。白々と夜が明けてきて、遠くに農家らしきものが見えた。

六 苦難の前途

「軍服では危ない、満服を手に入れよう」とAの発

言に一同うなずき、農家に行って衣服交換を申し入れたが、激しく拒否された。こうなったら背に腹は代えられぬと脅迫し、強奪同様にして満服を手に入れ、着替えた。すばしこいAは、少量ながら食糧も手に入れていた。生きるためとはいえ、強盗の行為は恥ずかしかつたが、わずかながら金を渡したことで自分自身を慰めた。「これからはお互いに、階級なしにして助けあい、各人の家族のもとに帰れるよう協力しよう」と、高粱畑に潜り込んで盗んだ食べ物を口にしながら、改めて誓い合った。

そのときに、不意に荒々しい足音と叫び声が近づいてきた。垣間見ると、さっきの農家の男とソ連兵たちだった。「しまった！ ここで死んでたまるもんか！」とばかりに、地面にへばりつきながら繁みの方に隠れた。「ヤボンスキー！ ヤボンスキー！（日本人）」と叫びながら、ソ連兵は辺りかまわずにマンドリン銃を乱射した。周りは「ブスッ、ブスッ」と弾が、葉をそぎ土をはね上げていて身動きがならなかった。それは十分間ぐらいであったが、一時間以上に思われた。

まったく生きた心地がなく、ただ神仏に祈るばかりだった。ソ連兵は成果ありと思ったのか、それともあきらめたのか、どちらかは知らないが退去して行った。そこにいることは危険だということで、すぐに行動を起こして吉林山脈の中に入ってしまった。大連への道のりはまだまだ遠かった。山中には多くの同胞が潜んでいた。ここまですぐにか逃げ延びてきた開拓団の老人、婦女子だった。その人たちは、満ソ国境地帯にいたために避難が遅れてしまい、いろいろな迫害にあったことを涙ながらに話してくれた。ソ連兵や現地人から、口に出して言えないようなひどい屈辱を受け、暴行されたりして死んだ人も随分いたとのことだった。女性は頭を丸坊主にして男物の服を着ているが、着のみ着のままの哀れな姿である。また、私たちのように部隊から離れてしまった兵隊のグループもいて、南へ南へと歩いていった。その中には、現地人に襲われ青竜刀で頭を割られたとかで、戦友に抱きかかえられて歩いている哀れな姿もあった。山中には、まだ敗戦を信じないで立てこもっている、武装した無傷の

部隊もいた。

山中彷徨いく日か、途中のある部落で、「兵隊さん！ 兵隊さん！」と呼ぶ声が出てどきりとした。着た切り雀の満服姿なのにと身構えて振り返ると、白く長いひげをのびし背を曲げて杖をついている、よぼよぼの老人であった。その老人は「わしは、日露戦争のときに捕虜になった。生きて帰国することは一族の恥辱であると思い、この土になるつもりで生きてきた。日本が無条件降伏したので、もう日本語を聞くこともできないと思い、声を掛けたのだ。どんなことがあっても家族の許にお帰りよ」と、たどたどしい日本語で話しかけてきた。日本人だったのだ。四十数年前の日本大勝利の陰には、人生を捨てた同胞がいたのだ。しかし敗惨の身とはいえ、私には人生を捨てることはできない。愛しい家族が待っているのだと思いつつ、その老人と別れた。

匪賊の巢窟の真ただ中を突破しなければ、前進は望めないと道路に出た。ソ連軍は戦車を先頭に歩兵部隊、トラック部隊が続々と南下し、日本人、中国人の

区別なくやりたい放題に振る舞って進撃している。中国人は昔からソ連人を「大鼻子グレイビーズ」と蔑称して憎悪していたが、その中国人が、かつての匪賊の姿に戻り日本軍から捕獲した武器を持って、部落ごとに砦を築き、部落同士が撃ち合い略奪し合っている。ちょうど日本の戦国時代と同じようで、強い部落が勝ち残るのであった。そんな状況にある部落と部落の間の道に、我々が入って行った。物音ひとつしない静寂、何かびーんと糸が張ってあるような緊張した空気、焼け付くように暑い広い道は、人っ子一人歩いていない。一人ずつ間隔をあけて歩くことにした。一人でとぼとぼと、ぼろの満服姿で歩いたが、道端には虐殺された日本兵の死体が、一糸まとわぬい姿で、ピラミッド型の五階建てぐらいの高さに積み上げられている。そんな山が一つではなく二つも三つもあった。部落の砦の上からは、日本軍から奪った銃で狙っているのだろう。それこそ全員びくびくしながら歩き、次の山の中に入り込んでほんと胸をなでおろす。日中に歩くことは困難となり、木を伐りカムフラージュして仮眠し、夜に

なつて北斗七星の輝きを頼りにして南に向かって歩いた。

七 女頭目の匪賊に囲まれて

後ろから馬蹄が響いてきた。振り返ると黒のビロードの支那服を着て黒眼鏡を掛け、両腰には二丁拳銃を下げた、颯爽とした若い女を先頭に一団が迫ってきた。「万事休すか！」と観念をせざるを得ない情勢となった。拳銃や小銃で威嚇射撃をしてきたので、我々は逃げまどうだけだった。その間にも数十人の犠牲者が出た。辛うじて川岸にたどり着いたが、このままでは向こう岸に渡ることもできずに、進退窮まってしまった。匪賊の方もどうしたのか、我々を遠巻きにして焚き火をはじめた。襲撃の隙を狙っているのかもしれないなかったが、無気味な静寂の一時が流れた。そのうちに匪賊団の頭目がやってきて、「日本人は、我々の土地や財産を略奪してきた。お前らの持ち物を全部そこに置いて行け」とどなった。口惜しいが、この状況では仕方がないことだった。頭目は、我々の集団の中にいた軍服の男を見て、鋭く詰問した。すると彼は、

やにわに隠し持っていた拳銃を取り出し抵抗しようとしたが、すぐに射殺されてしまった。事態は険悪となった。開拓団の老団長が、みんなから貢物を集めにかかった。私たちは無一物無一文なので、出す物はない。その時、何を思ったのかAが前におどり出て、達者な中国語でしゃべり始めた。

「今、中国は大変な時期でお気の毒に思う。しかし苦しいときもあつたであろうが、日本のおかげで発展したのではないか。それが今、大鼻子の理不尽な侵入によって、元の木阿弥になろうとしているのだ。中国はそれでよいのだろうか。我々は戦闘員ではない。今、生殺与奪の権はお前たちに握られている。我々は、このままでは全員死ぬほか無い」と臆するところなく堂々と言った。黙って聞いていた頭目は、一人当たり百円ぐらゐの金を置いて戻っていった。翌朝には、冊みを解いていずれかに立ち去ったが、Aの度胸のよさには感じ入った。私も百円也を持つことができた。

また、数日の彷徨が続いた。ある夜（もうそのころ

になると何月何日ということは分からなくなっていた）、暗くなつて部落にたどり着いたが、皆もこれ以上歩く気力も失われていた。その部落の長に救いを求めに行つて、必死に懇願した。「病人だけでも部屋の中で休ませてくれまいか」と言った。すると、意外にも穏やかな答えがかえつてきた。「つらい旅であつたらう、ここまで来るのには、大変な苦勞をしたことであらう。わしらは日本人には大変にお世話になつた。どうかゆつくりと休んでくれ。粟粥ならばあるので待させていただく」と言った。「長い苦しい旅路に一条の光」とはこのことか、感謝に胸のつまる思いであつた。私たちはそれぞれ軒下を借りて、温かな粟粥を涙しながら食べた。もうそのころは、夜は寒さが厳しかった。いつの間にか、霜がきらきらと輝きながら降りていた。ここはどの辺りなのかと考えているうちに、うつらうつらとしだした。

すると突然、銃声が夜のしじまを破り部落は騒然となった。隣り部落からの襲撃であつた。銃弾が容赦なく飛んでくるが、隠れ場所も分からず、横にあつた細

長の木箱に入り身をひそめた。銃弾が身近ではじける。乱れた足音、「アイヤー！」と泣き叫ぶ悲鳴、それらの錯綜がしばらく続いた。一刻を過ぎると静かになり、箱から出ようとしてぎょっとした。私の体の下には冷たい死体が横たわっている。飛び込んだ箱は棺桶だったのだ。飛び出した。部落は悲惨な状況だった。我々をかくまったのでこんな目に遭ったのではないかと、一同でなければなしの浄財を集めて渡し、感謝しつつ部落を離れた。

八 新たな決意

途中の部落では、親日派の韓国人部落に出会い、我々を温かく迎えてくれた。元気な者までが、オンドルの部屋で足腰を伸ばすことができた。そこで前の部落の話をする、心得顔で力強く「村の若い者が徹夜で見張りをしているから、ゆっくりと体を休めて、一時も早くお国に帰って下さい」と言った。体が温まるからと、マツカリ（日本の濁り酒）も飲んだ。

もうそのころは、ソ連軍は既に我々を追いついて、吉林、新京に向かっているということだった。大連に

も進駐していることであろう。この目で家族の生死を確かめたいと覚悟を新たにし、くじけてはならないと一層の決意を固めた。流浪転々、吉林の東百二十キロメートルにある、小都市の蛟河コウカの近くにたどり着いた。この部落でも後難を恐れて部落入りを拒否され、川原で夜を過ごした。その夜の月は美しかった。

月を眺めて眠られぬひとときを過ごしていると、着飾った一人の娘がお盆に饅頭を山のように盛って、お供の女を連れて近づいてきたが、それは村長の娘だった。「父があなたたちを部落に入れないのは、村民やあなた方のことを考えてのことですから許して下さい。今夜は中秋節です。お祝いの饅頭を作りましたから、子供たちにかけて下さい。ご無事を祈ります」と言って置いていった。そんなに優しい心を持った人もたくさんいたのだ。この川を下ると吉林だということまで再び歩き出したが、休んでは歩き、しばらく歩くと休むという繰り返しであったが、その度に犠牲者の死体が残った。

吉林では、日本軍の捕虜収容所があつてシベリア送

りの準備中であるとのことで、一般避難民が使役に使われていた。日本人である元吉林駅長は便所掃除をさせられていて、元部下であった中国人の駅員が駅長の仕事をしていて、私はいとこが吉林市内にいたので、それとなく元駅長に聞いたら、既に脱走したというこゝとで安心した。

我々は、ソ連軍停車場司令官に交渉して、無蓋車でいいから列車を新京まで出してもらうことに成功したが、二日たっても、三日過ぎても心配がなかった。そんなある日、突然に列車が動き出した。外にいた人々は慌てて乗り込んだ。当初三百人近い人数だった我々の一団も、今は半数にも満たなくなっていた。それでも、その人たちは列車に乗ることができて、みんなはほっと安堵したものだ。ソ連兵が列車の前後に護衛のためについていたが、その護衛兵は送り狼であった。二十分ぐらい走ると、すぐに止まった。すると、ソ連兵はマンドリン銃で威嚇しながら、時計や眼鏡などを探し求めて強奪をはじめた。目ぼしい物が無くなると今度は女を探し、勝手に放題な凌辱をはじめた。

今まで何とか身を守っていた十七、八歳の少女が辱めを受けて、自ら命を絶つたのもこのときだった。列車はまた、何ごともなかったように動き出して、新京（長春）に向かった。のろのろ運転中に連れ去られて、そのまま戻って来ない人もいた。普通であれば吉林から新京までは数時間で行くのに、四日間もかかって新京に着いたが、どこにも行くあての無い集団は降ろされて、駅前をうろろするばかりだった。数カ月前までの満州国の首都の面影は無く、ゴーストタウンそのものだった。

駅前の満鉄新京支社の裏手に「カラスの森」という木立がありカラスが真っ黒になるほど止まって一日中鳴き騒ぐので有名だったが、その木立はあっても、あれほどいたカラスは一羽もいなくなっていた。羽のある鳥は自由に飛び去るが、羽を持たない身が悲しくて哀れを感じたものだった。異様な叫び声に振り向き、がく然とした。凌辱された日本女性が、真っ裸でふらふらと歩いている。すでに気が振れているらしかつたが、叫び声は中国人の子供たちで、石を投げては、

「わあっ」とはやし立てている声だった。

児玉公園や新京神社には、避難民が大勢集まっていると聞いたので行ってみたが、中央大通りでもほとんど人影が無かった。皆息を潜めて隠れ住んでいるようだった。かつて児玉公園の入り口に堂々と建っていた児玉源太郎大将の銅像は、倒されて見るも無残であった。新京神社も鳥居は破壊され、本殿のみが辛うじて原形をとどめていた。その夜は、本殿の縁の下で夜露に濡れながら過ごしたが、深夜夜空に銃声が響き、同時に女性の悲鳴が二、三方所から聞こえてきた。ソ連兵の女狩りだそうだ。ここには在留邦人も相当いるはずだし精銳だった関東軍司令部もあった所だが、非戦闘員を守ることもできなくなったのかと思ひ、情けなくなってきた。不安な一夜が明けた。

今日まで生死を共にしてきた五人は、各人の目的がそれぞれ異なるのでここで解散することにした。これまで幾度となく落伍しそうになった私を助けて、ここまで何とか無事に連れて来てくれた戦友との別離は、悲しくかつ不安であった。私は、親戚が新京で工建会

社をしていることを思い出し、そこを訪ねた。家の出入り口や窓は、全部板でふさいであった。一つの窓から出入りしていたが、久しぶりに人間らしい気持ちを感じることができた。しばらくそこで休み、体力の回復を待って、以前世話になった満鉄の先輩を訪ねたが、終戦前に朝鮮經由で帰国したとのことだった。新京在留邦人は、コロ島經由で日本に帰れるということが伝わってきたが、私は一日も早く家族のいる大連に行き、安否を確かめたいと思ひ、止めるのを振り切って再び放浪の旅に出た。

九 再び放浪の旅で大連へ

ハンチングをかぶり背広を着て、餞別の百円を禪の中に縫い込んで新京駅から列車に乗り込んだ。機関車や客車の屋根の上まで乗っている。これからは、自分一人での旅で心細い限りであったが、帰心矢の如くで何事も起こらねばよいがと心の中で祈っていた。

しかしその願いととは反対に、すぐにことが起きた。「おい！ここに侵略者日本人がいるぞ！」と、朝鮮人と思われる男の声、それを合図に集まってきた者

に、私は息も絶えるほどのリンチを受けた。挙げ句の果てに、禪を残すのみの丸裸にされて、列車から放り出された。幸いに奉天（瀋陽）駅の近くだったので、すぐにソ連軍停車場司令部に駆け込み事情を話し、奪われた物を取り返してくれるように頼んだ。しかし「日本は負けたのだ！ ニチエボ（何とも仕方がないよ）」と言って、とり合ってくれなかった。奉天では頼るべき人はいない。次第に夜のとほりがおりてきた。このままでは凍死するしかないと考えているうちに、意識が次第に朦朧としてきた。

そのとき、「もし、もし」と言うかすかな女の人の声が聞こえたので、目を覚ましてみると、日本の女の人が風呂敷包を抱えて立っていた。「そのままでは死んでしまいますよ。これでよかったですら着て下さい」と言っ、夏服だったが上下の服を差し出された。地獄で仏とはこのことかと、感涙にむせんで受け取った。ちょっと小さかったが、困ったときの人の心の暖かさが体中を包んでくれた。後になって、あの婦人の名前を聞くこともしなかったと後悔したが、菩薩の姿が心

の中に残っている。

列車に乗るのは危険だった。南に向かっている二本のレールは間違いなく大連に通じているので、このレールを頼りに歩くこととした。それからの道中は大きな困難はなかったが、歩くことはきつかった。

肌寒さを覚える十月中旬に、やつとの思いで大連にたどり着くことができた。美濃町の地上三階地下一階の家は、満蒙の奥地から命ながら脱出して来た国際運輸の社員グループに貸していて、母たちは別の家にいたが数々の心労が重なって、病床に伏していた。大連にも既にソ連軍が進駐していたし、八路軍もいた。

「侵略者の全財産は没収する」といって、日本人を憎悪と怨念の目で見ていた。我々日本人は、国策にそってこの地に定着し、一生懸命に働いてきた。その結果の財産であるのに、敗戦で無一文となり、家財道具をひとつひとつ売り、その挙げ句に子供を売り、自分自身を売るようになってきたのだ。まだ売り食いのできる者は幸せな人であった。

夜になるとソ連兵による略奪、暴行、女狩りが当た

り前のように横行し、それに便乗して現地暴民も同じ行為をしていた。そのうちに延安亡命の日本人共産主義者が大連にも来て、共産思想の教育や、天皇制批判、その果てには私有財産没収まで始めた。大連の繁華街では、日本政府や軍部と結託して財産を作ったといつて、批判される人の名前が貼り出されて、毎日のように人民裁判があり、有無を言わず一方向的な判決で処断されていた。

十 四等国民の日々

そのうち、ソ連軍によるシベリア送りの男狩りが始まり、日本人の男を見つけるとすぐに捕らえて、そのままトラックに乗せどこかに連れ去って行った。捕まった人は、ほとんど再び帰っては来なかった。あの「東洋のバリー」と言われた美しい街も、無法暗黒の街に変わり果てていた。また、八路軍や偽八路軍による、軍資金狩りと称する金品の略奪も度々で、大連市民は極度に困窮していった。

我が家にもある日突然、日本共産党員と、それに同調した若者男女十数人が、六畳と八畳の二間に家族七

人が押し込められている家に乗り込んで来て、危篤状態の母の枕元で「日本の侵略、人民からの搾取、天皇制打倒、共産主義絶賛」などを滔々とまくし立てた。

挙げ句に、「共産主義は平等だから金を出せ」と言い出した。一番年長だった伯父が「今までもあっち、こっちから資金要求があつて、もうここには出すものがない」と言うとう母を見ながら私に「お前は脱走兵だろう。シベリア送りにするぞ!」と威した。私は「私はあなた方と同じ学生だ」と答えたら、「明日の晩から、毛語録の学習に出席せよ」と言つて引き揚げていった。Tという近所の男が、自分の身の安全を図るために我が家のことを密告したのである。伯父が老虎灘の八路軍本部に連行されたが、二日経つても帰されずに、家族一同は心配していたが、ようやく八路軍から「身代金百万円と引き換えに帰す」との連絡があつた。当時は既に銀行は封鎖されていて、手持ちの現金は少なく困つてしまった。そんなときに、どこからもなく日本橋郵便局が半日だけ営業するとのことを聞き、伯母と一緒に麻袋を持って早朝から並んだ。中国

人の局員は「敗戦日本人に、なぜこの金を渡さねばならないのか?」と言って、横柄な態度で十枚一束の札を「イイ、アル、サン……」と、わざと声を出しながら渡した。途中でおかしな点があつて、口を挟むと払い出しを中止してしまうので、こっちは伯父の命がかかっているので黙っていたが、帰ってからゆっくりと数えるとやはり数十枚不足していた。この身代金を持って伯母と一緒に行くつもりでいたが、伯母は「一緒に行くとせっかく無事に戻ってきたあなたが捕まり、シベリア送りになる恐れがあるから、私一人で大丈夫」とのこと、伯母は一人で出掛けた。

夜中になって二人は戻つて来た。ぱりぱりの陸軍伍長であつた伯父も、さすがに「厳しくて怖かつた」と言っていた。相当ひどく責められたらしく、恰幅のよかつた太鼓腹がへこみ頬はこけていた。向こうでのことは多く語らず、ただ「みんな命を長らえて、一緒に日本に帰ろう」と、涙ながらに言っていた。このときに思ったことだが、「人には余程でない限り気を許してはならない。自分が悪いことをしていないが、他を

密告してそれで自分の安全を図ろうとする者がいる」ということだつた。

このままの状態でも先行きどうなるか分からない。幸いに我が家はまだ売り食いで何とか生活ができるので、病床の母を伯母に頼んで、伯父の会社のS氏と密貿易をすることにした。S氏のいところが満鉄の機関士で、ソ連軍の列車を瓦房店まで運転しているの、それに便乗して奉天や新京に行き、大連からは日本茶や甘味品を持って行き、向こうからは帰国準備で残置する家具、道具を物々交換で持つて帰るという仕事で、同時に両方の情報も交換できると考えた。満鉄の作業服や、「RABO・TA(ラボター)」の腕章を準備した。しかし肝心の列車がいつ出発するのか不明で、待機が長くしかも思うような成果もなかった。次いで、家財道具を道端に並べて露天商まがいのこともした。更にソ連軍に接收された魚網工場に工員として働き、ナスの塩漬けの配給を受けて家に持ち帰つたが、食べられる物ではなかった。窮余の一策として、帝政ロシア時代からの港町の「ロシアマチ」で、ジャ

ンクを雇い日本への脱出を計画したが、これも途中で密告されて没収されてしまった。

大連の初春はまだ寒く、燃える物はすべて燃やして暖をとっていたが、そんなとき伯母が大事にしていたダイヤモンドを風呂の焚き口に隠してあったのを知らないで燃やしてしまい、非常に残念がられたこともあった。また、毎日のように日本人労働組合員と称する者が来て、めぼしい物を脅し取って行く始末で、このままではやがて餓死するしかないのではと思っていた。北満の奥地から身ひとつで避難してきた老人、子供、女性は乞食^{こじき}同然の姿で市内にあふれていて、死者が続出した。寒い灰色の空の下で、避難二度目の正月を迎えたが、身内だけで新年のあいさつをする形ばかりの正月だった。帰国の話は何回となく流れ、そのつど荷物を整理して準備したが、順番は回ってこなかった。

昭和二十二年三月の初め、日本人会から引揚げが再開されるから、大連埠頭倉庫へ集合するようにとの連絡があった。今度は本当のようだった。持ち物は、一

人当たり現金で千円及び手荷物の上に制限された。寒い時期なので、幾枚も重ね着をし持てるだけの荷物に名札を付けて準備した。伯父、伯母、弟の三人は三日前に倉庫に向かい、祖母、母、叔母それに私と四人は後から家をでたが、私たちが家を出た途端に、暴徒がなだれ込んで来て、残っていた家財などすべて持ち去ってしまった。集合場所の大連埠頭倉庫は、いつも通っていた道であったが、道の両側では、中国人が奇異な目で見ていたし、小孩^{ショウガイ}が我々に石を投げてきた。

十一 祖国が見える

大連埠頭倉庫で、先発の伯父たちと再会できてほっとした。話によれば、同じ引揚船に乗れるようだった。このことは、何よりも嬉しく力強かった。青鬼、赤鬼とも思えるソ連兵が待ち受けていて、厳重な身体検査が始まったが、ここでもめぼしい品や、書き物はすべて没収されていた。私はこのことを予期して、あらかじめ用意していたウォッカを渡して見逃してもらえた。収容所では、一つの鍋が洗面器になったり、食缶になったりする難民生活が始まったが、家族が一番

難儀したのは筵で困った素掘りの便所だった。私は虎林以来の体験済みであるが、病人の母は随分と苦しんだことであつた。

乗船するために荷物を岸壁に運び出した。目の前には、引揚船の高砂丸が日章旗を翻して沖待ちしていたので、私たちはすぐにでも乗船と喜んでいたが、止められてしまった。若者がグループを組んで荷物の監視に当たり、家族は再び収容所に戻つた。結局、一週間足止めさせられた。事情は分からないが、目の前の高砂丸ではなく、後日来る遠州丸に乗船することのことだった。

三日目に、黒点が水平線に見えてきた。胸が高鳴つた。段々と近づいてきて遠州丸と書かれている船尾の船名がはっきりと読みとれた。今度こそ乗船できるようにと祈つた。学生時代には何の苦しみも無く、日満航路を往復していたことを思うと、同じ大連をこのような形で去ることになろうとは思つてもみないことだった。私は荷物監視が原因で発熱していたが、これで日本に帰れるのだと思うと緊張せざるを得なかつ

た。

引揚船遠州丸は廃船間際の貨物船で、蚤棚のような応急の棚が船内に設けられていた。私たちは貨物並みだった。ソ連兵と日本人会の十数人が監視していて、一人、一人の氏名が確認されて乗船した。後続の家族の様子を心配しつつ甲板に両足が着いたときに、胸がいっぱいになった。忘れもしない昭和二十二年三月十日のことであつた。デッキには、ここ久しく見たことのない白衣の天使が並んでいて、「皆さん！ 大変にご苦労でした。ただ今皆さんを迎えにきました！」との声が聞こえたが、私は発熱のため意識が朦朧としてきて倒れてしまった。船内で、祖母の大切な物ばかりを入れていたリュックサックを盗まれるというハプニングが起きて大騒ぎをしたが、見つからなかつた。このような場合でも人の物を盗むのかと憤慨したが、どうしようもなかつた。これでもう捕まることも無いと思うと、今までの疲労が一度に出て虫けらの如くに横たわつた。普通ならば「蛍の光」のメロデーが流れ、七色の投げテープが飛び交つて、華や

かななかに哀愁をさそう出航風景なのだが、そんな気持ちにはさらさら無かった。船が渤海湾^{ボツクワン}を進むころになると今までに散々同胞を痛み付けていた者が次々と捜し出されて、甲板上で吊し上げにあっていった。船内では、日本の国内情報がこまごまと放送されていた。わたしは、自然に「ドスブダーニヤダルニー」（さようなら大連）とつぶやいていた。

大連を出航して十六日目に、朝霧の中に島々が点々として見えてきた。その島々の頂には青々とした松が生えていて、私たちを温かく迎えてくれた。昭和二十二年三月二十五日、博多沖に遠州丸は錨を下ろした。ここは、確かに日本領海である。やっと日本に降り着いたのだった。

十二 結び

引き揚げてからの生活再建は、すべての引揚者と同じく艱難辛苦の日々であったが、幸いに今日まで生きてこられたのは、私を取り巻く多くの人々の温かい庇護があつたのことに感謝してやまないし、ことあるごとに昔の友人、知人の無事を念じて尋ね歩いている。

多くの軍人、軍属そして民間人の方々が亡くなられたことを痛惜し、心からご冥福をお祈りするとともに、平和を祈らずにはおれない。

白い墓標

兵庫県 渋谷 恭子

真っ青な空の下の南新京の広野は、果てしなく白かった。日差し映える雪はまばゆく、緩やかな起伏をなして光に満ちている。人が踏んで固めた道を、小学校三年生の私は、母の後から遅れぬように歩いて走っていた。羅紗の三角帽子に、綿入れの半纏^{はんけん}は暖かかった。白熊の毛でできたシューズは、母がお金に替えてしまったが、手作りの半纏も軽くて暖かで、防寒靴から入り込んで来る冷たさも感じなかった。

緩やかな坂を越えると、またその先に果てしない広野が続いていたが、そこに白木の柱が群立しているのが見え始めた。黒い粒のように見えた人影に段々と近